

1974~

東海宣教会の歴史を振り返る
教会史の歴史

ひろば
広場

東海宣教会議IVフォーラム・発題

2001年11月6日

15分

“健康な教会”とは クリフトン・ワレンの本「健康な教会への道」

河野勇一（緑キリスト教会牧師）

I. どうして今“健康な教会”なのか

- 1970年代以降のいわゆる“教会成長ブーム”
- 1990年代におけるその反動としての“教会成長アレルギー”
- 21世紀に向かっている宣教的教会形成における、本来の「教会成長論」再評価の動き。そして「教会の成長」より根本的な「教会の健康」概念の採用

II. “健康”とは何を意味するのか：一般的な“健康”観の変遷

健康ブーム

- WHOの定義：健康とは単に病気がないとか、虚弱ではないというだけではなく、身体的、精神的、(霊的)、そして社会的に完全に良好な状態をいう。→非物質
(1946年)
- QOL (生活の質) を考慮した新しい定義：よく食べられ、よく眠れ、排泄に支障がなく、疼痛がなく、たとえあっても苦痛にならず、心理的に安定し、職場や家庭学校といった社会的環境において十分その役割を果たすことができ、生き甲斐を持って充実した日々を送れること。(浜松医科大・永田勝太郎)
しかし、これらには①絶対(理想)的健康はありえない、②健康かどうかをさまざまな数的基準値や正常値で判断せざるを得ない、などの問題があるとして、米山は、もっと主体性や社会性、そして病気との共存性をも持たせるとともに、健康を実現可能なものとするために、次の定義(?)を提案している。
- 米山公啓の定義：自分の目標設定したことを、苦痛なく遂行できること。(『健康』という病 集英社新書)・・・これが現代、受け入れられつつある「健康観」であろうと思われる。すなわち、人がどのような状態にあらうとも(元気であらうと病気であらうと、障害をかかえていようと死期を間近に意識していようと)、今生きていることを積極的に受けとめて、自分なりの目的をもって生きていること

健康観

III. 教会の“健康”を問うことについて：聖書的な見地からの妥当性

- 「キリストのからだ」のように「からだ」を比喻として用いたパウロの生命的教会観(霊的な有機生命体、キリストにある新しい集合人格)。
- 旧約聖書の「聖」の概念と「健康」(神のいのちに満ち満ちている)の近さから、「健康な教会」とは「聖い教会」に近い概念である。

T1. 不健康な教会でも成長するのは正しいか? P-X (この成長)

T2. 教会の中に神の国の豊かさが現れてくるのはなぜか?

エザン 具体的に、リッパなどの

自分から語ってその言葉をいっているおどろきなく見よう
そのおどろきの

言葉にのって

言葉はひろがっていく。

T3.

IV. “健康な教会”とは：最近、この概念を普及させた著書から

- 目的主導の教会（リック・ウォレンの定義）：教会が神から与えられた「存在目的・使命」（「目標」ではない！）に生き生きと生きているとき健康である。
何の為に
だから、それぞれの教会は聖書から教会の存在理由を学び取り、それにもとづいて遂行すべき目的・使命（複数）を明確化、組織化して、その時代、その地にふさわしく、かつ全体的展望のもとにバランスよく適用するならば、その教会は必ず固有な成長を遂げる。（「健康な教会へのかぎ」特に8頁参照）
- 自然に成長する教会（クリスチャン・シュヴァルツのアプローチ）：世界の多くの教会からのアンケート分析をもとに、教会を健康診断し、治療しようとする。その中心的概念は「自然な教会成長」であり、人のすべての努力は神の成長の自動性を解放することによるものを絞っていくことである。その解放の鍵として8つの質的特徴があり、その弱点を強化することで健康かつバランスのよい（成長しやすい）教会となれる。（「自然に成長する教会」参照）

V. 結論

“教会の健康”を考えると、まず一般的な考えとしての「健康の反対は病気であり、健康とは病気（問題）が一切ない状態である」を変える必要がある（これは、人の健康観においてもそうである）。

そのうえで「健康な教会」の神学的意味を考えれば

- “健康”という概念は、聖書の「聖」の概念を身近でイメージしやすいことばに言い換えたものといえよう。すなわち健康な教会とは「聖い霊（いのち）」に満たされた教会のことであり、そのいのちの自然な発露としてそれぞれの教会には固有な成長があるはずである。
- 伝統的に言われてきた「使徒的教会」も、カトリック教会的な「使徒継承の教会」という以上に、本来的には「使徒的使命を果たしている教会」すなわち、神とキリストからここに遣わされ、存在させられている使命をはっきり自覚して取り組んでいる教会の意味を持つ。「目的主導の教会」とはその意味で「使徒的教会」の現代的な言い換えであり“健康な教会”の主要な概念である。
- それぞれの生命体は、神から与えられた生命としての共通性ととともに他にない個性と環境を併せ持っている。また、誕生からいくつかの成長期を経て、成熟、衰退、そして死にいたるライフ・サイクルのなかに生かされている。それらを正しくとらえて、与えられた今を自分らしく生きることが“健康”であり、キリストのからだなる教会にもそれは言えるのではなからうか。

*これらのことから「健全な教会」よりも“健康な教会”のほうが、よりよい表現と思われる。

カン
成長する教会
孤立している
（いようとするのか？）
死なない

「東海直教会議Ⅳ・フォーラムⅡ」／テーマ：「健康な教会」？発題資料

序(1)発題は私見／奉仕教会、所属教団、神学塾等の見解や立場ではない。

(2)テーマに関する素朴な疑問を提示（ある意味消極的）－積極的教会形成論ではない。

(3)テーマが「教会成長」との関連で取り扱われているのも問題としたい。

1 新約聖書

神の救済、学究の救済

(1)新約聖書の教会はどれも健康な教会で常に成長していた教会だったのか？

不健康な教会、問題の多い教会、分裂したり衰退する教会もあったのではないのか？

新約聖書は当時の教会に多くの問題や戦いがあつたから生まれたのではないのか？

(2)新約聖書の教会は私たちの模範？か見本？かあるいは目標か？

もしそうならどの教会を模範、見本、目標にするのか？

むしろどんな教会からでもさまざまな問題や戦いの中での歩みを学べるのでは？

(3)新約聖書の教会は、途上にある教会であり、戦う教会ではなかったのか？

私たちは到達した教会や勝利した教会になることを求めるべきではないのでは？

弱さを誇り、試練に耐え、戦い続けることができるこそ健全ではないのか？

(4)新約聖書の教会の多くはローマ教会以外は大半がやがて消えていったのではないのか？

教会の主が、ある教会を生み出し育てられることもあるが、ある教会にはその使命を終えさせられることもあるのでは？ 教会が衰退したり無くなるのも主の御心では？

2 教会史

(1)拡大／成長主義的な教会にはしばしば問題があるのではないのか？

独善的、支配的、権力志向的体質がないか？（例：中世のローマ・カトリック）

(2)プロテスタントでは福音を伝え聖礼典を正しく執行するのが真の教会ではないのか？

真の教会の中心的なしるしよりも他の面が教会評価のものさしになっていないか？

(3)「エクレシオラ・イン・エクレシア」（教会内教会）の流れが重要ではないのか？

真の信者による教会形成は小さな群れを目指す道ではないか？（例：敬虔主義等）

(4)教会の主の主権的介入／主が用いられる人や教会があるのではないのか？

少数の人々や小さな教会が用いられてきたのでは？（例：宗教改革、リバイバル等）

3 教理－教会論

(1)教会はどの教会もみな三位一体の神の教会ではないのか？

大教会だけでなく、小さな教会にも小さな主の物語があるのではないのか？

教会を比較し評価することは神のお働きを比較し評価することにならないか？

(2)教会は三位一体の神と隣人を愛して仕えるためにこの世に遣わされているのでは？

教会成長は自己目的的吗？ 地の果てまで散っていくのが教会の使命ではないか？

小教会も主の使命を果たせるのでは？（例：地方教会はその地域唯一の主の教会！）

(3)教会像には多様性があるのではないのか？

例：神の民、家、家族、軍隊、主の体、羊群、葡萄の木、花嫁、真理の柱等々

「教会成長」論における教会の評価は十分に多様ではないのではないのか？

多様な教会像のあらゆる面において成長している教会はどこにもないのではないのか？

変わりがなく成長している教会もあるし、
まじかに成長を遂げている教会もある。

- (4)公同の教会は互いに分かち合い、重荷を負い合う教会＝「交わり」ではないのか？
それぞれの教会／働き人や信者がお互いに良いものを分かち合うことが大切では？
弱さや問題のある教会／働き人や信者が互いに補い合い助け合うことが大切では？

4 実際 *試練の中でしか成長しない*

- (1)教会には常に問題や不健康さ、弱さや誤り、罪や苦難等が入って来るのではないのか？
新しい教会員が持ち込む問題等、教会員の中にある弱さや罪が常にあるのでは？
教会を構成する信者は完全な人／愚かさや弱さや罪深さがない人になれるのか？
この世の影響、外部からの迫害等が教会には入って来るのが通常ではないのか？

- ✕(2)弱さの中に現わされる主の力、病の中でしか味わえない主の恵みがあるのでは？

例：妻の癌闘病－本人にも家族にも、教会にも多くの主の恵みが与えられた。

ただ神の栄光のために！－三位一体の神が自由に働かれる教会であるべきでは？

人が人の知恵と力で教会を成長させるなら人が誉められたり人の教会にならないか？

- ★(3)試練や戦いが与えられるのは神に信頼されている証ではないのか？（例：ヨブ）

分裂や衰退、困難な問題、迫害や戦いは教会の主が愛の計画の中で与えられるでは？
多くの問題に取り組んでいる教会からこそ多くのことが学べるのではないのか？

問題のない教会を求めているのか？：命がけで戦った使徒達に呆れられないか？

- (4)主の導きといわゆる「教会成長プログラム」は調和するのか？

主が教会に与えられる自由な導きといわゆる成長の原則はどう調和するのか？

主のみことばに学びつつ、折りつつ、主に導かれつつ歩む教会ではいけないか？

教会をプログラムに当てはめる事はその教会に主が与えられた独自性を歪めないか？

- (5)教会の数量的成長は多くの人が救われる結果ではないのか？

より多くの人が救われるためより広くより多くの人に福音を伝えるべきではないのか？

一つの教会に多くの人々が導かれることを求めるよりも、できるかぎり多くの教会に
少なくとも人々が導かれることを願って、教会が協力をすべきではないのか？

- (6)「教会成長」を教会の働きの目的にすることは自己目的的ではないのか？

教会は、神を愛し、隣人を愛するために、この世におかれているのではないのか？

多くの信徒が与えられるのは主からの使命を果たすために必要なのではないのか？

数量的に成長している教会には主に対してより大きな責任があるのではないのか？

- (7)キリストに似た者として成長していくのがクリスチャンと教会の目標ではないのか？

問題や病等のない完全な人／教会になることがキリストに似た者とされることか？

病や弱さや試練や罪の中にいる人と共に生きる人／教会になるのが目標では？

問題や苦難や迫害の中でも神と人を愛して生きる人／教会になるのが目標では？

- (8)教会がかしらであるキリストに達するのは世の終わりまで続く歩みではないのか？

クリスチャンがキリストに似た者に変えられていくのは一生の歩みではないのか？

私たちは長い期間をかけ、主が経験されたのと同じようなさまざまな経験を通して、

キリストに似た者へと成長させていただけるのではないのか？ 短期間で成長可能？

⇒多くの方々からの率直なご批判やご意見やご質問等をお聞かせいただきたい。

おられいく

2001年10月10日（後藤喜良）

大光を教会大光を聖徒

- (序) 歴史に学ぶこと
教会成長論が辿った歴史

歴史から学んできて
「人類がいつまで歴史に学ばなくてはならないか」ということ」

I. 教会成長論の歴史的考察

1. マクギャブランの教会成長運動：30年のイデオロギー

- ・マクギャブランの問題意識
- ・ミSSIONステーションの宣教学的検証。
- ・新たな発見と方法論

ピープル・ムーブメント

2. 1960年代以後の展開

- ・教会成長論の理論的発展と、それに伴う問題
- ・方法論としての展開と日本における盛衰
- ・残された課題：方法論的前提と神学的前提の課題

社会学

知覚バベルの塔

証→モデル→原則→法則

↓
How To

II. 教会「健康」論の貢献

- ・成長論が衰退する中であって、もう一度教会のあり方を問い、学べ、自己改革することへの動きが活発になっていった。
- ・成長より、状態を述べる中で、聖霊の働きへの期待がある。
- ・数よりも、質的な要素を重要視する。

歴史学・神学
プロセス
研究が深い!

自然の成長する教会
8つの条件

学際性
etc.

III. 教会「健康」論の課題

1. 方法論的課題

- ・普遍性の査定教会成長論で社会学的考察が介在する上での危険は、成長理論の普遍性の誤診である。
- ・教会成長論の普遍性の過度の強調は、一方では文化や歴史的現実を無視した無批判な模倣へとつながり、他方ではその反動として総体主義的傍観者となる危険がある。日本で、教会成長論がブームの様に広がり、潮が引くように消えていったのは、前者から後者への振り子運動と見ることができる。
- ・教会健康論も、この点で注意する必要がある。たとえば、成長している教会の質的次元を求める点では、教会成長論の反省に立っているが、根本的方法論は、科学の方法をとっている。それは、データの選択から分析や解釈のあらゆる過程に解釈者の前提が問われるからである。
- ・リック・ウォレンの「目的主導の教会」という発想の利点と限界
- ・そのものの背後にある、文化的傾向性は、必ずしも普遍性を持つものではない。

人間的
存在

色をぬって+色は出てくる
バランスをとれぬものか?

どこまでも
神の掌とい
えぬとい
えぬがある!

- ・C・シュヴァルツの八つの特質の重要性と限界
- ・この特質を強調する研究も、その結果を生み出すデータの選択において、ある特定の評価基準が既に存在し、同時に歴史的事情も介在していることが考えられる。

2. 歴史性の欠如

- ・データ分析の限界。 歴史的次元が含まれない。
- ・それを望むことは出来ないしすべきでもない。逆にいえば、歴史的には、そのようなnaturalといえない成長も、じつはありえるのだということである。神は自然の法則すら破られる存在である。しかし、限界のあるものと認識するなら、非常に多くの点で学ぶところがある。したがって、この分析から学ぶことは、重要であろう。
- ・現在の状態をより強調する傾向がある。
- ・共時性 > 通時性

IV. 神学的課題

◇ ミッション・デイと教会「健康」論

- ・教会成長論も、教会健康論も、基本的に教会が宣教の中心に位置付けられている。教会が祝されることをもって、宣教の働きが認識される。
- ・教会中心とは、どう言うことか。教会のあり方を問うことが重要となる。健康や成長の原則を追求すること自体は、相対化される必要がある。実際、生きた細胞は生命現象が活発だが、パンだねの譬えは、「パリサイ人のパンだね」としても用いられる。
- ・教会中心とミッション・デイの視点
- ・教会と宣教のタイポロジーから
- ・健康 → 成長する条件 → 自動的に成長する（神導的に）

V. 提案

- ・原則などの、コンテキスト依存性。
- ・体験を基本として発見したこと、あるいは調査や研究によって見出された原則は、ある特定の状況、文化、歴史的現実と係わり合うことを認識する必要がある。
- ・限界や課題を知ることは、むしろその価値を高めること。
- ・更なる課題が次のチャレンジとして提供されていることを認識し、さらなる研究が必要とされる。 → 教会とは何なのか（あるいは、誰なのか）、聖書はどこまで教会のあり方を提示しているか。